

# NEWS LETTER

from Iwami Art Museum

February 2025 vol.40



島根県立石見美術館ニューズレター

開館20周年記念企画展「石見の祈りと美ー未来へつなぐ中世の宝ー」  
中世の美術工芸品を未来へつなぐ

開館20周年記念企画展「石見の祈りと美ー未来へつなぐ中世の宝ー」  
守られてきた仏像から見える、中世石見の為政者たちの極楽浄土

関連事業

鷗外文学の魅力にふれ、想像の翼を広げる旅へ

# 40



雪舟等楊《四季花鳥図屏風》(右隻) 室町時代 京都国立博物館蔵 重要文化財



A



B



C

A.《小袖 白茶地桐竹模様綾》室町時代 東京国立博物館蔵 重要文化財  
Image: TNM Image Archives

B.《華南三彩貼花文五耳壺》明時代 益田市・萬福寺蔵

C.《太刀 銘成高》鎌倉時代 京都国立博物館蔵 重要文化財

## 中世の美術工芸品を未来へつなぐ

企画展「石見の祈りと美—未来へつなぐ中世の宝—」では、平安時代末から安土桃山時代にかけての石見地域ゆかりの美術工芸品に着目し、それらを守り未来へ伝えていくという人々の営みにも注目する。ここでは、その営みの事例を紹介したい。

中世に石見国益田(現在の島根県益田市)を本拠としていた益田家は、当主・益田元祥の代に、関ヶ原の合戦を契機に長門国須佐(現在の山口県萩市須佐)へ移り、萩藩毛利家の永代家老となった。その後の寛永21年(1644)には、元祥の孫にあたる益田元堯が益田就宣に対し、元祥から譲られた家宝を譲渡している。その目録は、「益田元堯諸道具譲渡目録」(東京大学史料編纂所蔵)として現在まで残されており、それを読むと当時の益田家にとどのような美術工芸品が伝わっていたのかわかる。

ここでその全てを紹介することは、紙数の関係上できないが、現在まで伝わっている美術工芸品のうち、主なものを以下に記したい。

雪舟等楊《四季花鳥図屏風》(表紙画像)は、譲渡目録で「雪舟花鳥之屏風」と記されているため、遅くともこの目録が書かれた寛永21年(1644)には益田家に伝わって

いたことがわかる。雪舟筆と伝えられている花鳥画は数多くある中、本作は現在唯一真筆と認められている花鳥画である。

《小袖 白茶地桐竹模様綾》(図A)は、譲渡目録では「呉服」という名に加えて但し書きとして「雪之下之白織物」とあり、伝来として「東山公方様ヨリ治部少輔宗兼拝領之」という記載もある。「東山公方様」とは通常は足利義政のことを指すが、時期を突き合わせるとおそらく足利義植の間違いであり、「治部少輔宗兼」は益田宗兼のことである。よって、この小袖は益田宗兼が足利將軍から拝領したものと、当時から認識されていたことがわかる。

《華南三彩貼花文五耳壺》(図B)は、寺伝によれば益田家より拝領したものと伝えられている。譲渡目録には「小嶋葉茶壺」とあり、益田家が日本海を介した対外交易の中で入手したものと考えられている。このタイプの壺は完成品として残されるものがほとんどないため、本作は貴重である。

《太刀 銘成高》(図C)は益田家伝来の名刀として知られており、譲渡目録には「犬房之太刀」と記載されている。「犬房」は鎌倉時代の武将・伊東祐時の幼名「犬房丸」のことで、この太刀は源頼朝から伊東祐時へ渡った。その後、伊東祐時の末

裔である内田氏が益田家に仕えたために、益田家に献上されたものと考えられている。

もう一つ、譲渡目録には「来国光之刀」という刀も記されている。益田家伝来品としては《刀 額銘来国光切付銘埋忠磨上之》(鎌倉時代、京都国立博物館蔵、重要文化財)が現存しているが、はたして譲渡目録に記載の刀がこの現存作なのか、その詳細は研究途上にあるため、ここでは詳述しない。

以上のように、譲渡目録に記載された美術工芸品は、現在では重要文化財に指定されているものも多数あり、地域の歴史はもちろん、当時の人々の価値観や美意識を考える上でも欠かせないものである。また、ここで紹介したものほかに、益田家伝来品は多数現存しており、その詳細については企画展の中で紹介することとしたい。



図1



図2



図3

- 図1. 重要文化財  
木造阿彌陀如来立像  
浜田市・心覚院
- 図2. 島根県指定文化財  
木造阿彌陀如来立像  
江津市・清泰寺
- 図3. 重要文化財  
木造不動明王坐像  
神奈川県鎌倉市・極楽寺

## 守られてきた仏像から見える、 中世石見の為政者たちの極楽浄土

三尺阿彌陀という言葉がある。文字通り三尺、すなわち像高1メートル弱の阿彌陀の立像である。平安時代末頃から造られ、鎌倉・室町時代すなわち中世を中心に盛んに造られた。普段は寺院に祀っているが、臨終を迎えようとする人の枕元に移動させ、いわゆる「臨終行儀」の本尊とすることもあったという。

比叡山横川で活動していた僧源信が寛和元年(985)に著した『往生要集』が当時の公家や僧侶に広く読まれた。『源氏物語』に「横川の僧都」として出てくる高僧は、この源信をモデルにしたと言われ、『源氏物語』が執筆された11世紀初頭に源信の存在は多くの公家たちの間で知られていたと思われる。『往生要集』には極楽往生する方法が具体的に書かれており、当時の公家たちはその内容に驚き、実践しようとした。『往生要集』はその後、公家や僧侶以外の人々にも読まれるようになり、多くの日本人にとって死後の極楽往生は共通の望みとなる。

本展では、石見地方に遺る中世の三尺阿彌陀を複数展示する。浜田市心覚院の木造阿彌陀如来立像(重要文化財・像高98.5センチ)は体内に建長7年(1255)の年紀が記される。江津市清泰寺の同じく木造阿

彌陀如来立像(島根県指定文化財・像高90.0センチ)は体内に文永7年(1270)の年紀と仏師院豪さらにその弟子たちの名前が記される。仏師院豪とその弟子たちは京都蓮華院・三十三間堂の千体千手観音立像の一部に名前が見え、当時京都で活躍していた院派仏師であることが分かっている。京都で活躍していた仏師に造像を依頼出来た人物が、石見の寺院の関係者にいた可能性があり興味深い。

石見の中世寺院は、地元の国人領主たちの厚い庇護を受けていたところも多い。彼ら国人領主はなぜ寺院に庇護を与えたのだろうか。国人領主も極楽往生を望んだのか。

寺院の建立には莫大な経費が掛かる。また、寺院の維持にはその仕事に専任する人々、すなわち生産から切り離された人々を数多く抱えなければならない。当然寺院の庇護という行為が為政者としての義務であるとの思いもあっただろう。しかし、彼らの止むに止まれぬ軍事行動など仏教の教えに反する行いへの反省、そしてそれでもなおかつ極楽往生を望む思いなどが交錯しているのではないかと。展示会場にずらりと並んだ三尺阿彌陀を見て、中世石見の人々の思いを感じ取っていただくと同時に、700年

以上も石見の人々に守られてきた貴重な文化財が数多く遺っていることに注目していただきたい。

これらの阿彌陀像は石見に遺された像であるが、造られたのち石見を離れていった像もある。神奈川県鎌倉市極楽寺(重要文化財・像高92.1センチ)の木造不動明王坐像はその代表と言える。本像は益田市染羽天石勝神社の別当寺(神社を管理する寺院)であった勝達寺に祀られていたが、明治に入り勝達寺は廃絶、仏像類が外に出され、その後不動明王像は現在の極楽寺に祀られた。染羽天石勝神社はかつて瀧蔵権現といい、中世において地元を治めていた益田氏の厚い庇護を受けていた。不動明王像は、勝達寺廃絶後廃仏毀釈で破棄される寸前だったともいわれる。石見の地を離れてしまったが、その後大切に守られてきた文化財も数多くあることを紹介したい。



コレクション展「石見人 森林太郎、美術ヲ好ム」関連プログラム

ミュージア vol.24 「初夏の朗読会 文学がいざなう美術への旅」

2025年5月24日(土) グラントワ小ホール

## 鷗外文学の魅力にふれ、 想像の翼を広げる旅へ

「森鷗外ゆかりの美術家の作品」を美術作品収集方針の一つに掲げる当館では、鷗外と関わりのあった明治・大正時代の画家や彫刻家の作品を収蔵し、展覧会などで鷗外と美術との関係を紹介している。しかし今や出身地である石見においても、鷗外の作品に親しんでいる人は多くないのが現状である。

鷗外がベルリン留学中の体験をふまえて書いた「舞姫」は有名だが、ドレスデンの貴族社会を描いた「文つかひ」(読みは「ふみづかい」、ミュンヘンを舞台に親友の洋画家・原田直次郎を主人公のモデルとした「うたかたの記」とあわせて「ドイツ三部作」とよばれていることは、一般にはあまり知られていない。軍医としての修行を目的としながらも鷗外が西洋の芸術に触れる機会となったドイツ留学は、彼の見識や芸術観の形成に大きな影響を与えた。そこで見聞した西洋の文化や出会った人々の記憶が凝縮された三部作は、鷗外の視点から明治・大正の美術界を見る際の重要な鍵となる。しかし「ぜひ読みましょう」と言っても、三作とも擬古文、つまり古文を模した文語体で書かれているため、気軽に読むことができない。そこで、原文の魅力を味わいながら内容の解説もきけるような場を設けたいと考え、朗読会を企画した。鷗外没後100年にあたる2022年に「文つかひ」を取り上げたのが好評だったため、23年に「舞姫」を読み、今年はいよいよ第三弾として「うたかたの

記」を紹介する。

この朗読会の指南役は鷗外研究者の美留町義雄さん、そして物語に命を吹き込むのは声優の佐々木望さんである。ドイツ三部作を楽しむにはある程度の知識が必要のため、まずは美留町さんから時代背景や、鷗外がどんな体験をしたのかなどをお話いただく。朗読するのは全文ではなく、物語を象徴する場面や印象的な言葉、すぐれた情景描写がみられる部分などの抜粋で、その合間にも解説が加わる。解説では本文の現代語訳だけでなく、写真などもまじえながら当時のドイツの社会状況や文化も紹介される。それによって観客は、例えば「文つかひ」の主人公が憧れの姫君と再会した煌びやかなドレスデンの王宮や、「舞姫」の主人公が恋人と幸せな時を過ごした活気あるベルリンのカフェなどの情景を思い浮かべることができる。専門家ならではの読み解きが、辞書を引くだけではとどまらない物語の世界へいざなってくれる。

佐々木さんはテキストを分析し、読む速度や強弱によって生まれるリズム、間のとり方、さらに声色などを工夫した朗読を展開する。声の演技に精通した読み手の声は、黙読では理解が困難な原文を、やさしく耳に届けてくれる。主人公の揺れ動く心や壮麗な都市の景観などを、鷗外が記した格調高い言葉のまま味わいたい、というこの朗読会のねらいは、この技術に支えられているといってもよい。主役の男女はもちろん、御

者や老婆などの脇役にも個性が宿り、文語体ながらキャラクターが立ち上がってくるセリフもききどころである。

なお、「目」、「生計」といった古い読みをする言葉は音だけでは理解しづらいため、漢字から意味をつかめるよう、原文の字幕をスクリーンに投影するといったサポートもなっている。

さて、今度の朗読会で紹介する「うたかたの記」は、ミュンヘンの美術学校に留学した日本人画学生と、モデルの少女との恋物語である。鷗外がミュンヘンで謳歌した束の間の青春や、実際に起きたバイエルン王・ルートヴィヒ2世の変死事件を下じきに、虚構と現実を織り交ぜたロマンティックな小説だ。また、凱旋門に立つ女神の彫刻、美術館に飾られたヨーロッパの名画、そして主人公が命を削って描き上げたローレライの絵など、様々な美術品にいろどられている点で、美術館と劇場のコラボレーション公演「ミュージア(MUSEUM×THEATER)」にふさわしい作品ともいえる。

ちなみにこの朗読会は前半に鷗外の小説を読み、後半は様々な文学作品を楽しむ2部構成となっている。今度の公演の第2部は「鷗外」「美術」「旅」をキーワードに、ゲートから安野光雅まで時代や地域をまたいだ内容となる。鷗外の名作から広がる文学と美術への旅を、ぜひ楽しんでいただきたい。

(川西由里 当館専門学芸員)



ミュージア vol.19 「朗読の夕べ 文学と美術のあわいに」 2022年11月26日  
右:佐々木望(声優)、左:美留町義雄(大東文化大学教授)



ミュージア vol.21 「朗読の夕べ 森鷗外のクリスマス」 2023年12月23日  
(右から)美留町義雄、佐々木望、筆者